

①現状(航空写真)

天神川左岸 16

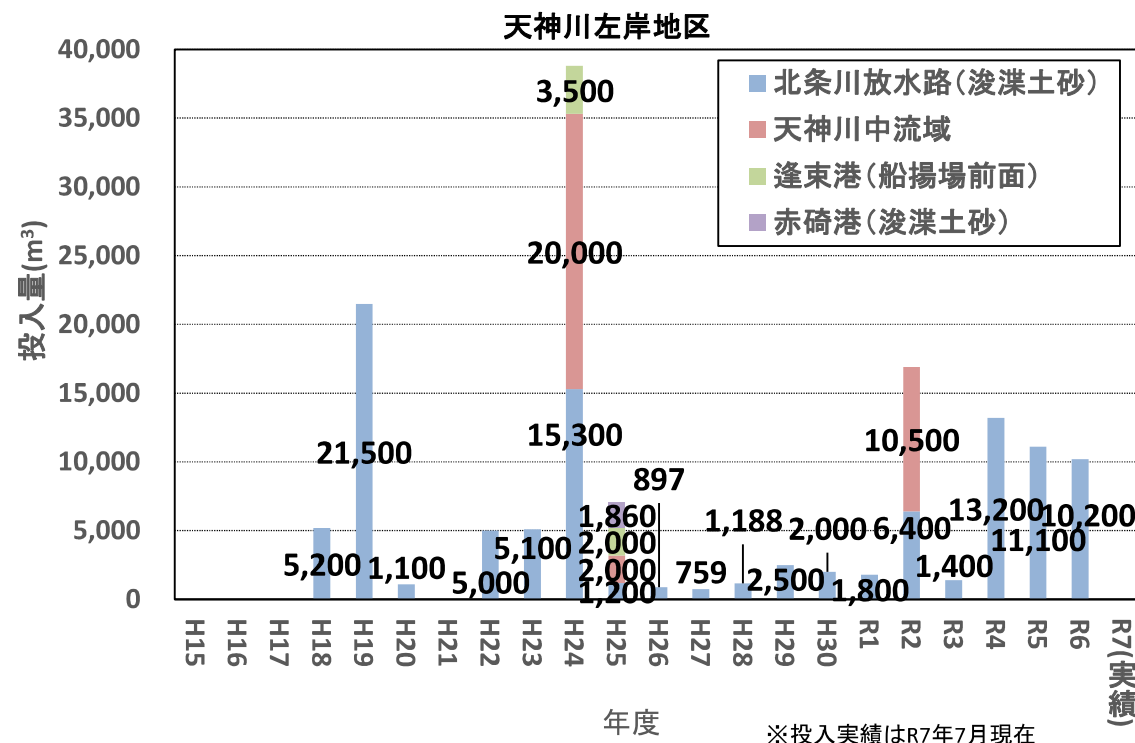
R7年8月4日撮影



②現状(サンドリサイクル実績)

天神川左岸¹⁷

- ・北条川放水路が概成したH18年度から河口砂州の浚渫を継続的に実施している。浚渫量は堆積状況に応じて年度によってばらつきがある。
- ・R6年度は、令和5年度と同程度の浚渫が実施されている。



③現状(長期的な汀線変化)

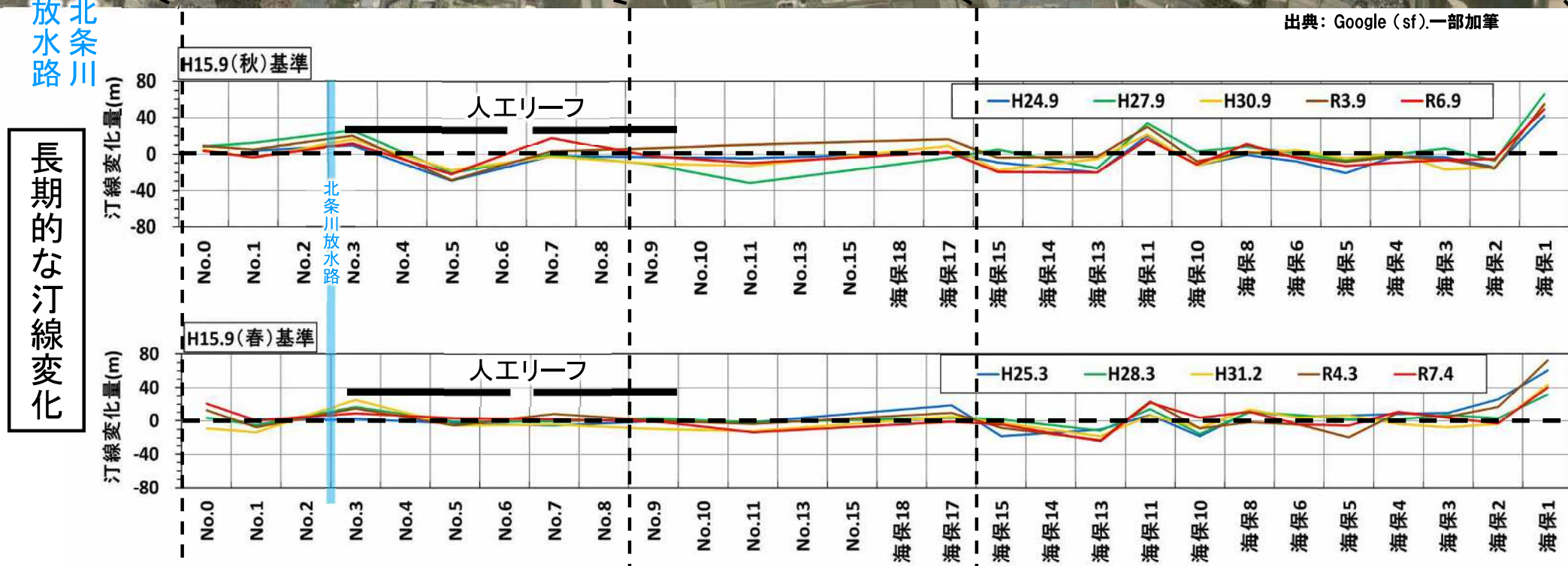
長期的な汀線変化：北条川放水路河口付近は、左岸側はサンドリサイクルによって基準年の汀線を概ね維持しており、右岸側は人工リーフによって基準年の汀線を概ね維持している。

国坂地区は、経年的な汀線の変動はあるが、全体として基準年の汀線を概ね維持している。

西新田場～東新田場地区は、海保13～15の後退、海保11の前進など、基準年の汀線から局所的な変動が確認される。



出典：Google (sf).一部加筆



H15年9月を基準とした長期的な汀線変化

※測量基準年は、継続して保有している測量データの最も古いデータを設定(季節毎)

④現状(短期的な汀線変化・砂浜幅)

天神川左岸 19

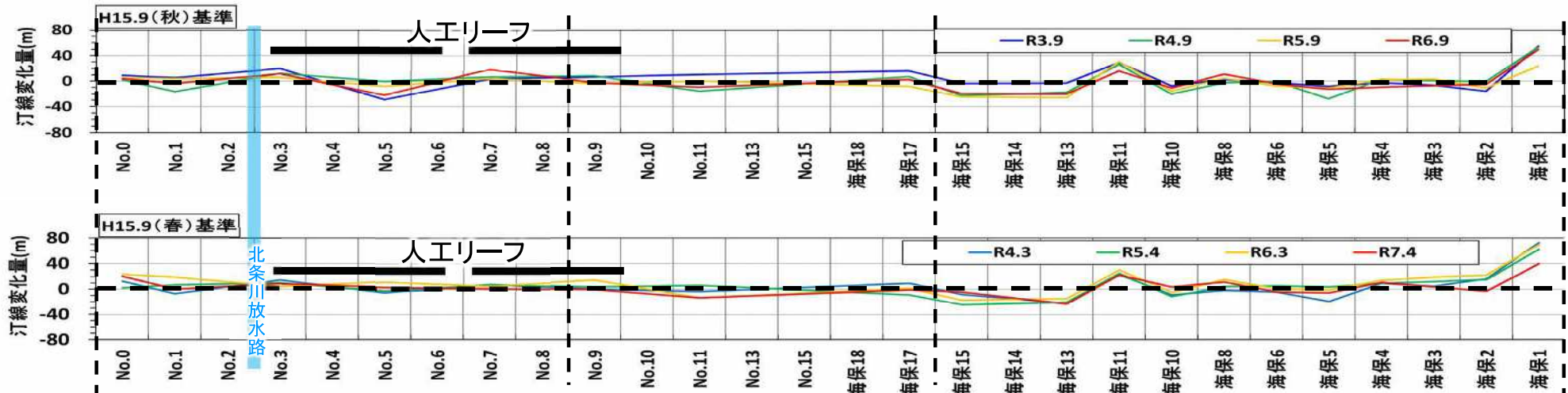
短期的な汀線変化：北条川放水路河口左岸は、サンドリサイクルによって基準年の汀線を概ね維持している。右岸側は、人工リーフによって基準年の汀線を概ね維持している。

国坂地区は、基準年の汀線を概ねを維持している。

西新田場～東新田場地区は、局所的な汀線後退（海保13～15）、汀線前進（海保11）が見られる。

砂浜幅(R7春)：国坂地区(No. 13、海保18)、西新田場～東新田場地区(海保6、5)にて、防護面の目安浜幅（25m）を下回っている。

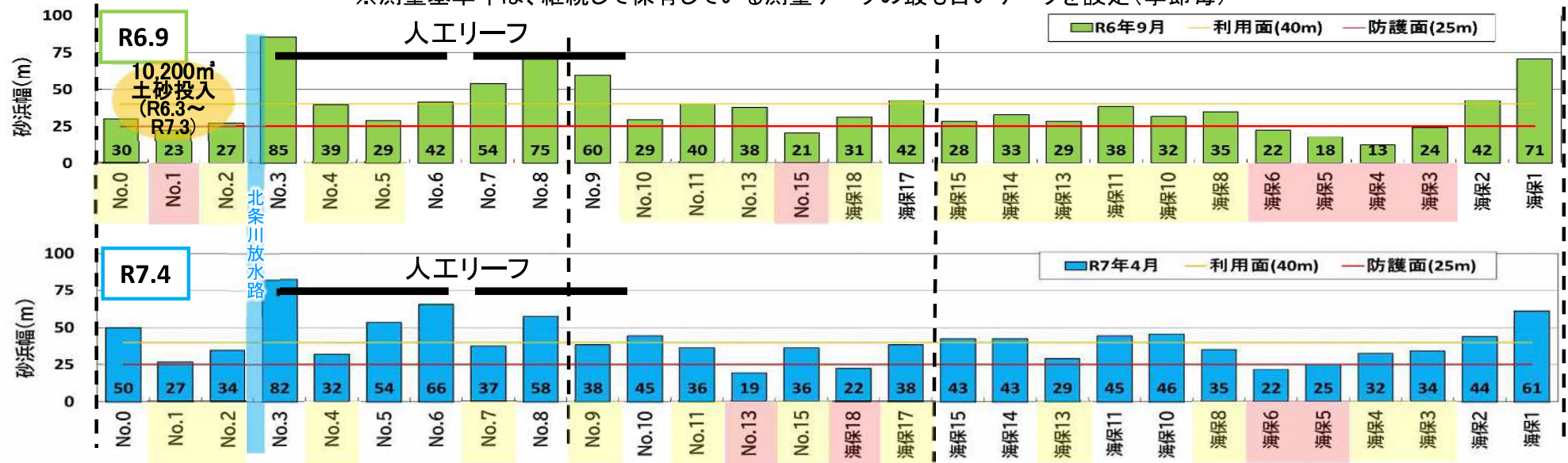
短期的な汀線変化



H15年9月を基準とした短期的な汀線変化

※測量基準年は、継続して保有している測量データの最も古いデータを設定(季節毎)

砂浜幅



R6年9月、R7年4月測量時の砂浜幅

※赤色ハッチ: 防護面の目標浜幅25m以下
黄色ハッチ: 利用面の目標浜幅40m以下

※測点は200mピッチ

⑤土砂変化分析(中期)

天神川左岸 20

【H31. 2とR4. 3土砂量比較】

○海岸全体として、約19万m³の侵食傾向にあることが算定された。

【R4. 3とR7. 3土砂量比較】

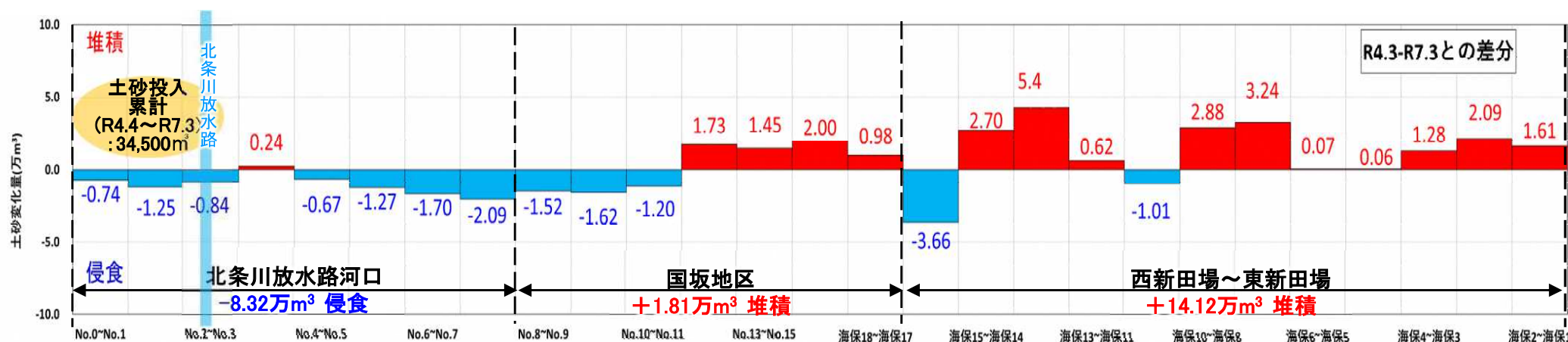
○海岸全体として、約8万m³の堆積傾向にあることが算定された。

○北条川放水路河口では概ねの区間で侵食傾向にある。左岸側では、河口で掘削した土砂を投入しているが、侵食傾向を示している。



H31年2月とR4年3月の土砂量比較

※測量基準点～TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))



R4年3月とR7年3月の土砂量比較

※測量基準点～TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))

※100m間隔の測線におけるシングルビーム法による測量結果をもとに平均断面法で土砂量を算出

⑥課題と対応方針

【対応方針（案）】

- 放水路河口は、概ね基準年の汀線を維持しているものの、土砂量は減少傾向にあることから、引き続き左岸側への養浜とモニタリングを継続する。
- 国坂地区は、概ね基準年の汀線を維持しているものの、防護面の目安浜幅が確保できていない箇所があることから、引き続きモニタリングを継続する。
- 西新田場～東新田場は、概ね基準年の汀線を維持しているものの、近年局所的な汀線後退（海保13～15）が確認されること、防護面の目安浜幅が確保できていない箇所があることから、引き続きモニタリングを継続する。



● : R7.4測定 防護面の目標浜幅25m以下

【北条川放水路河口】

【国坂地区】

【西新田場】～【東新田場】

出典：Google (sf).一部加筆

	北条川放水路河口	国坂地区	西新田場～東新田場
施設整備状況	人工リーフ1基（H15年度に整備完了）	人工リーフ1基（H15年度に整備完了）	—
対策実施状況	サンドリサイクル		
利用状況	利用なし		
長期的な地形変化（H15～R6、7）	サンドリサイクル、人工リーフにより基準年の汀線を概ね維持	基準年の汀線を概ね維持	局所的な前進、後退は見られるが、基準年の汀線を概ね維持
短期的な地形変化（R3、4～R6、7）	サンドリサイクル、人工リーフにより基準年の汀線を概ね維持	基準年の汀線を概ね維持	局所的な前進、後退は見られるが、基準年の汀線を概ね維持
砂浜幅（R7.4）	防護面の目安浜幅（25m）を確保	防護面の目安浜幅（25m）を下回る箇所がある。（7箇所中2箇所）	防護面の目安浜幅（25m）を下回る箇所がある。（12箇所中2箇所）
問題点・課題	突発的な浜崖の発生、概ねの区間で土砂量が減少傾向	突発的な浜崖の発生、防護面の目安浜幅（25m）の確保	突発的な浜崖の発生、防護面の目安浜幅（25m）の確保
今後の対応方針（案）	北条川放水路河口では概ねの区間で土砂量が減少傾向にあること、国坂地区、西新田場～東新田場では防護面の目安浜幅が確保できていない箇所が存在することから、以下の対応を実施する。		
	左岸側への養浜とモニタリングの継続	モニタリングの継続	モニタリングの継続

①現状(航空写真)

由良川左岸 22

R7年8月4日撮影



妻波海岸

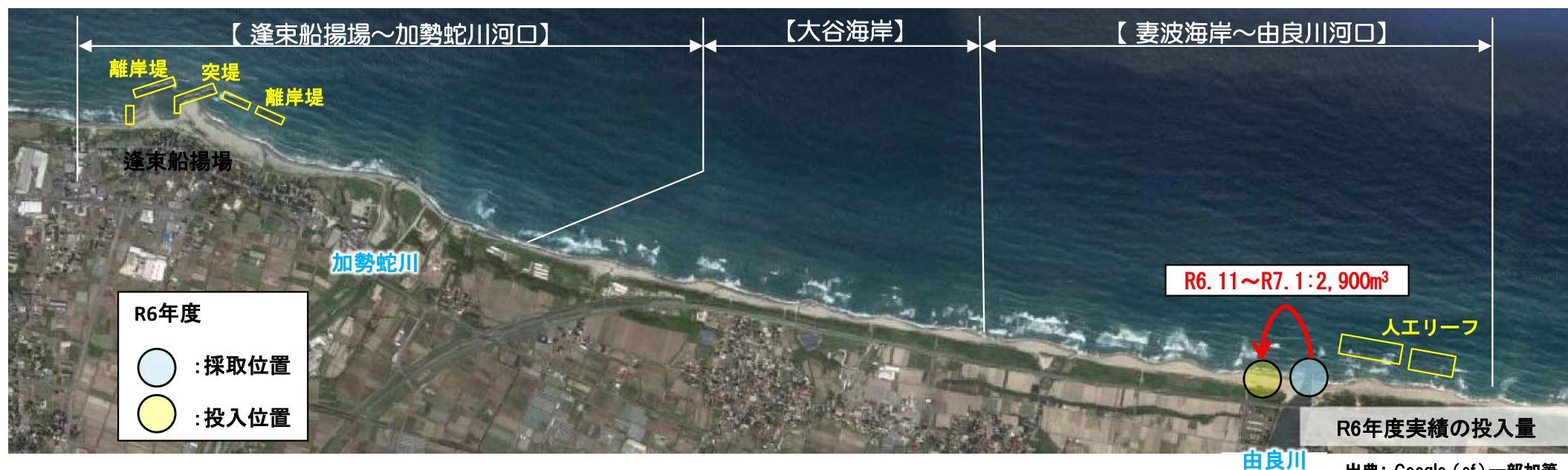
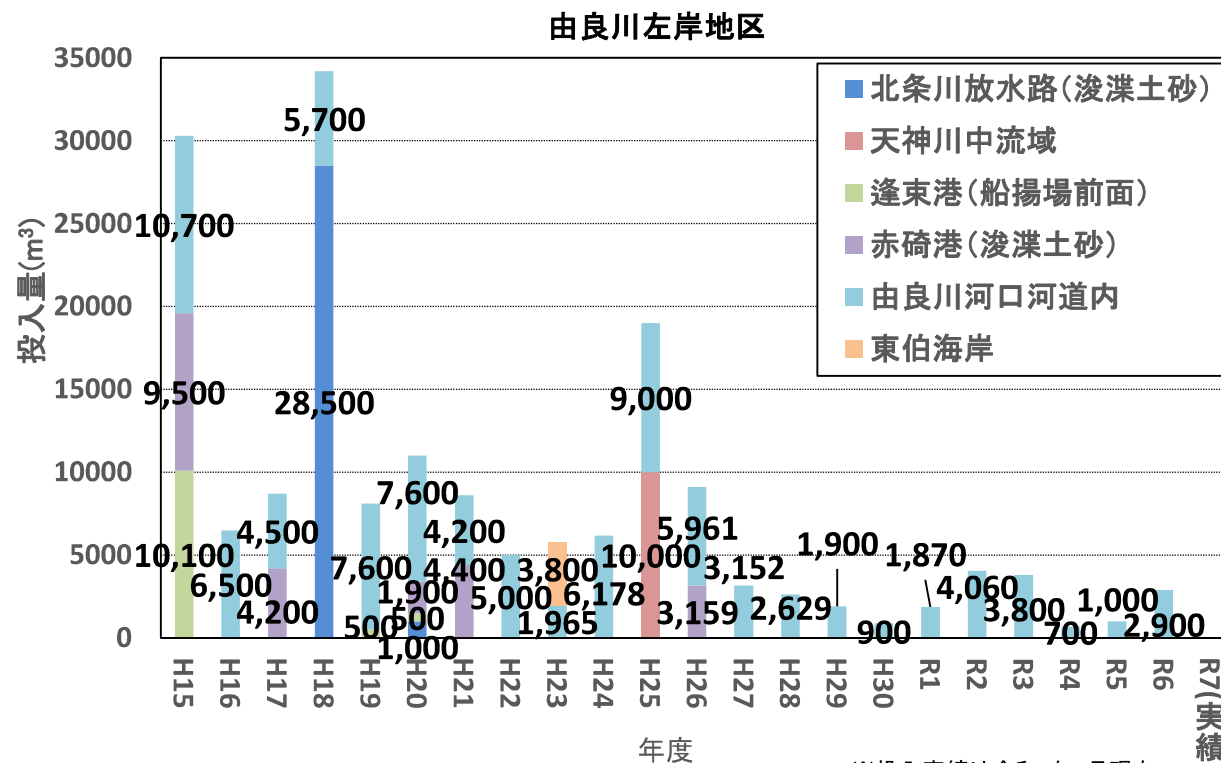
逢束船揚場→

人エリーフ

②現状(サンドリサイクル実績)

由良川左岸²³

- ・ H27年度以降、由良川河口の掘削土砂のサンドリサイクルのみであり浚渫量（養浜量）は700～4,060m³である。
- ・ R6年度には、由良川河口の掘削が行われ、左岸側に2,900m³の養浜が行われている。



③現状(長期的な汀線変化)

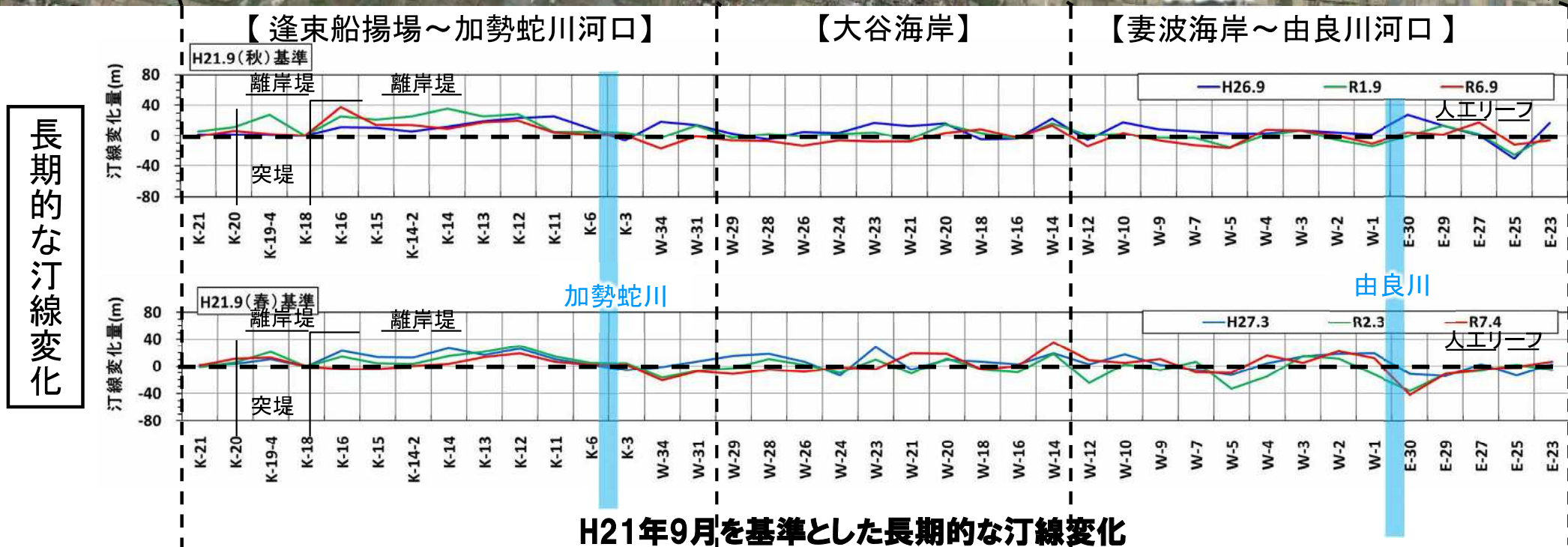
長期的な汀線変化：逢束船揚場～加勢蛇川河口では、離岸堤などの整備によって基準年の汀線から前進傾向にある。

大谷海岸では、基準年の汀線を概ね維持している。

妻波海岸～由良川河口では経年的に前進後退を繰り返しているが、基準年の汀線を概ね維持している。



出典：Google (sf)一部加筆



H21年9月を基準とした長期的な汀線変化

※測量基準年は、継続して保有している測量データの最も古いデータを設定(季節毎)

④現状(短期的な汀線変化・砂浜幅)

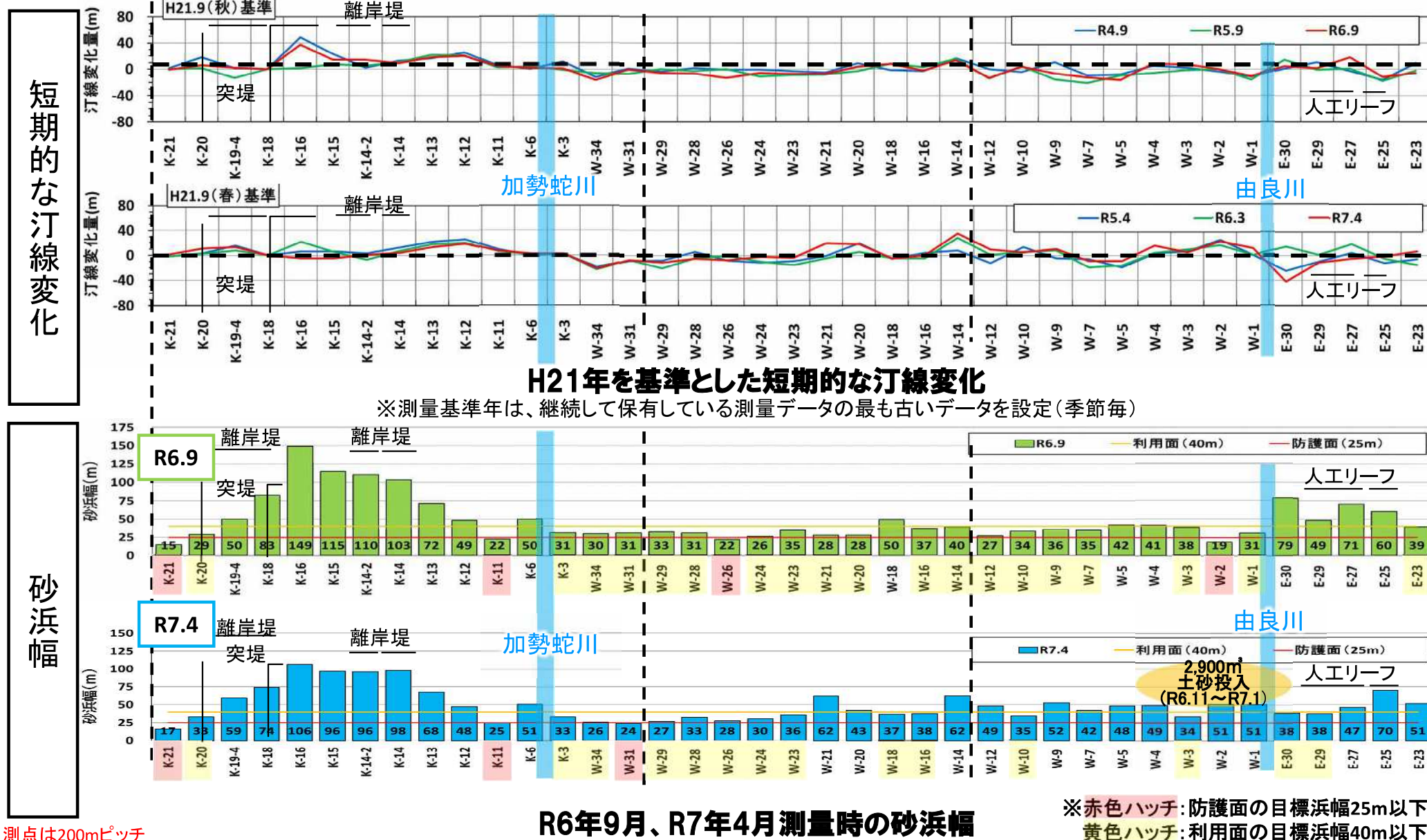
由良川左岸 25

短期的な汀線変化： 逢束船揚場～加勢蛇川河口では、離岸堤等の整備によって汀線は前進しており、経年的な変動は比較的小さい。
近年加勢蛇川右岸のW-34で局所的に後退傾向が見られる。

大谷海岸では、基準年の汀線を概ね維持している。

妻波海岸～由良川河口では、基準年の汀線を概ね維持している。

砂浜幅(R7春)： 突堤等の影響により漂砂下手で、防護面の目安浜幅を下回っている箇所（K-21）が見られる一方、漂砂上手のK-16では堆積傾向である。 加勢蛇川右岸側ではW-31のみ防護面の目安浜幅を下回っている。



※測点は200mピッチ

⑤土砂変化分析(中期)

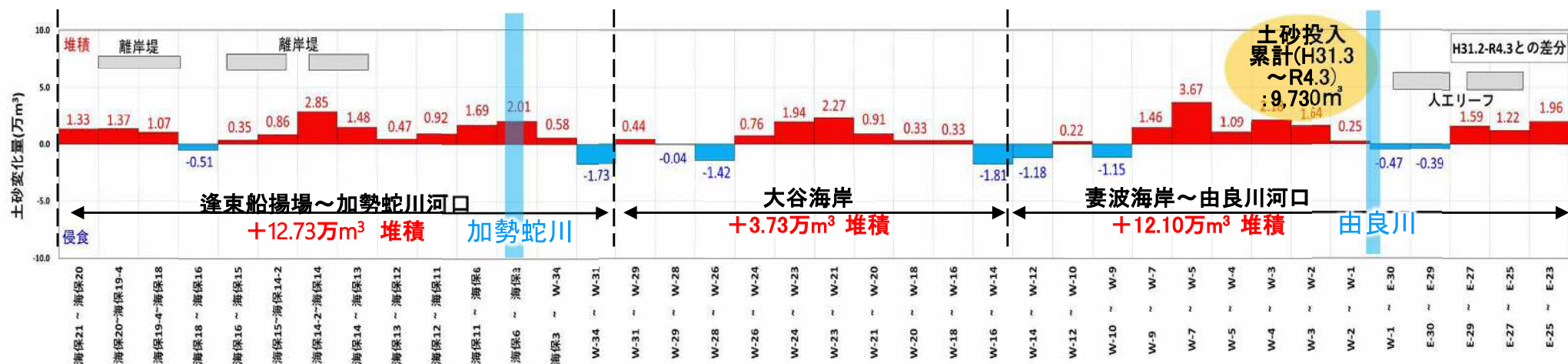
由良川左岸 26

【H31.2とR4.3土砂量比較】

○海岸全体として、約29万m³の堆積傾向にあることが算定された。

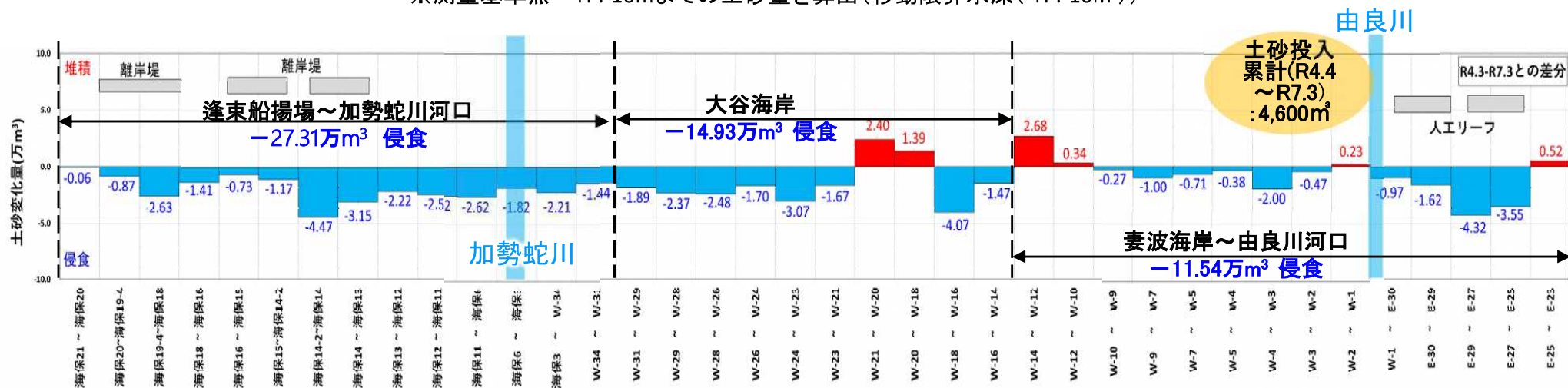
【R4.3とR7.3土砂量比較】

○海岸全体として、約54万m³の侵食傾向にあることが算定された。



H31年2月とR4年3月の土砂量比較

※測量基準点～TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))



R4年3月とR7年3月の土砂量比較

※測量基準点～TP.-10mまでの土砂量を算出(移動限界水深(TP.-10m))

※100m間隔の測線におけるシングルビーム法による測量結果をもとに平均断面法で土砂量を算出

⑥課題と対応方針

由良川左岸²⁷

【対応方針（案）】

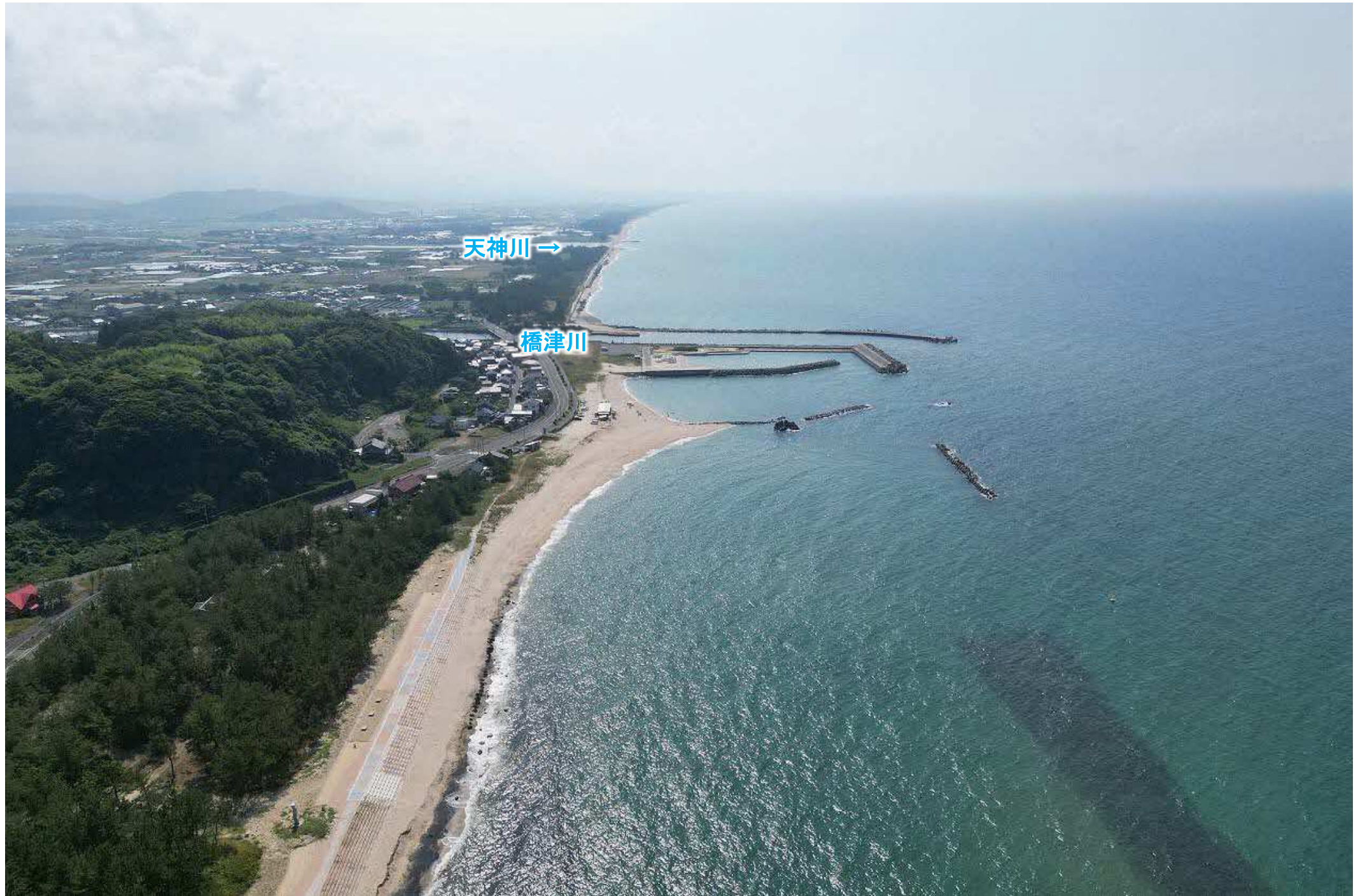
- 逢東船揚場～加勢蛇川河口については、防護面の目安浜幅(25m)を下回る箇所があること、土砂量が減少傾向にあることから、モニタリングを継続する。
- 大谷海岸については、基準年の汀線を概ね維持しているものの土砂量が減少傾向にあることから、モニタリングを継続する。
- 妻波海岸～由良川河口については、サンドリサイクルにより基準年の汀線を概ね維持しているものの、土砂量が減少傾向にあることから、サンドリサイクルを継続するとともにモニタリングを行う。また、高波浪により突発的に発生する浜崖については、緊急的な養浜等に対応する。

出典：Google (sf).一部加筆



	逢東船揚場～加勢蛇川河口	大谷海岸	妻波海岸～由良川河口
施設整備状況	離岸堤3基、突堤2基	－	人工リーフ2基
対策実施状況	浚渫	－	サンドリサイクル
利用状況	利用なし		
長期的な地形変化 (H21～R6、7)	離岸堤などの整備により基準年の汀線から前進傾向にある。	基準年の汀線を概ね維持している。	経年的に前進後退を繰り返しているが、基準年の汀線を概ね維持している。
短期的な地形変化 (R4、5～R6、7)	離岸堤などの整備により基準年の汀線から前進傾向にある。近年加勢蛇川右岸のW-34で局所的に後退傾向が見られる。	基準年の汀線を概ね維持している。	基準年の汀線を概ね維持している。
砂浜幅 (R7. 4)	防護面の目安浜幅を下回る箇所がある。(15箇所中3箇所)。	防護面の目安浜幅 (25m) を確保	防護面の目安浜幅 (25m) を確保
問題点・課題	防護面の目安浜幅 (25m) の確保、海岸全体で土砂量が減少傾向	海岸全体で土砂量が減少傾向	突発的な浜崖の発生、海岸全体で土砂量が減少傾向
今後の対応方針 (案)	逢東船揚場～加勢蛇川河口において防護面の目安浜幅が確保できていない箇所があること、海岸全体で土砂量が減少傾向にあること、高波浪による突発的な浜崖発生が懸念されることから、以下の対応を実施する。		モニタリングの継続と突発的な浜崖への対応
	モニタリングの継続		

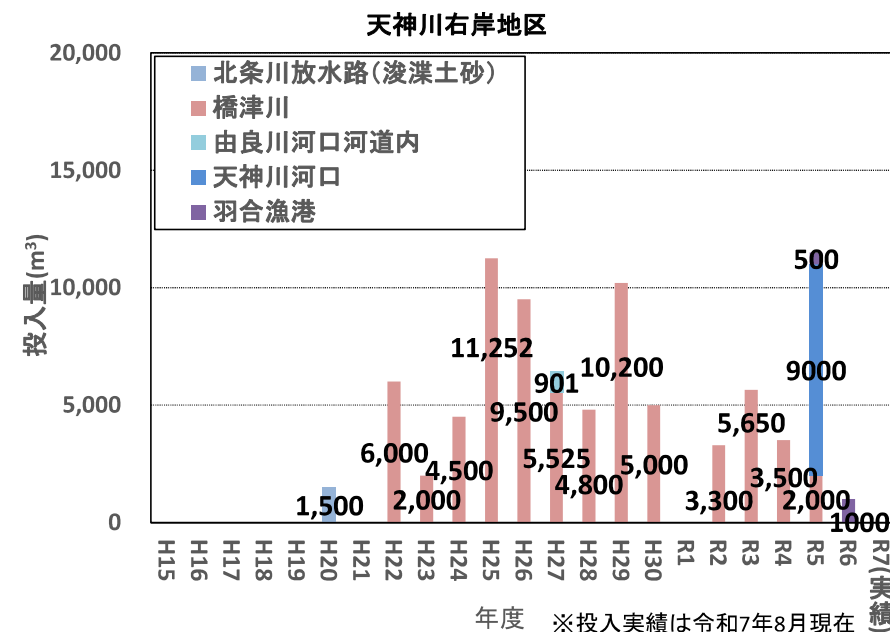
R7年8月4日撮影



②現状(サンドリサイクル実績)

天神川右岸²⁹

- ・年度によりサンドリサイクル量のばらつきがあるものの、橋津川河口堆積土を活用した土砂投入が、H22年度以降ほぼ毎年行われている。
- ・R6年度は、羽合漁港から1,000m³が長瀬海岸に土砂投入されている。
- ・天神川右岸地区全体で累計8.6万m³の土砂投入が行われている。



③現状(近年の汀線変化)

【平成30(2018)年以降の汀線比較】

- 天神川右岸地区では、継続的な測量を実施していないため、国立研究開発法人産業技術総合研究所が提供している衛星画像【LandBrowser】および欧州宇宙機関(ESA)が管理する【Copernicus Browser】を用いて、平成30年以降の汀線変化状況を把握した。

【現状】

- 令和7年の画像では、天神川河口砂州のやや拡大と天神川右岸における汀線の若干の前進が見受けられる。

【対応方針(案)】

- 汀線は経年的に前進と後退を繰り返しており、今後もモニタリングにより汀線の状況を把握するとともに、河口や漁港に堆積した土砂を活用したサンドリサイクルの継続が必要。



出典: "The source data were downloaded from AIST's LandBrowser, (<https://landbrowser.airc.aist.go.jp/landbrowser/>) produced from ESA remote sensing data"



出典: The source data were downloaded from Copernicus Browser. (<https://browser.dataspace.copernicus.eu>)

近年の空中写真による汀線変化

【参考】令和7年度_鳥取沿岸海水浴場開設状況

31

○県内の海水浴場11か所のうち、令和7年度に開設された海水浴場は9か所。

○鳥取砂丘海水浴場はサンドリサイクルによる砂浜再生により3年ぶりに開設。

○開設されなかった2海水浴場は地元管理者の高齢化に伴う担い手不足や、海水浴客減少に伴う運営難が理由に閉設。

名称	皆生温泉 海遊ビーチ	八橋 海水浴場	ハワイ 海水浴場	うの 海水浴場	小沢見 海水浴場	白兎 海水浴場	賀露みなと 海水浴場	鳥取砂丘 海水浴場	浦富 海水浴場	牧谷 海水浴場	東浜 海水浴場
市町村名	米子市	琴浦町	湯梨浜町		鳥取市				岩美町		
開設状況	開設	閉設	開設	閉設	開設	開設	開設	開設	開設	開設	開設
開設期間	R7. 7. 12 ～ R7. 8. 24	—	R7. 7. 11 ～ R7. 8. 17	—	R7. 7. 19 ～ R7. 8. 17	R7. 7. 5 ～ R7. 8. 17	R7. 7. 19 ～ R7. 8. 17	R7. 7. 24 ～ R7. 8. 24	R7. 7. 18 ～ R7. 8. 17	R7. 7. 18 ～ R7. 8. 17	R7. 7. 18 ～ R7. 8. 17

